

『一般部門 最優秀賞』『備忘六』

あらすじ

「社会は昼に進み、世界は夜に膨らむ」。トラウマを抱え、ままならない現実に傷ついた小日向は、空想世界に逃げ込む。そこで彼女は、六本足の怪獣・グーデモスライダーに連れられ、唯一の記憶「白いかえる」を探し「永遠に夜の京都」を彷徨うのだった――生きづらさを抱える全ての人に贈る、切実な恋と仄かな希望を描いた現代のお伽話。

作品の一部抜粋

1 プロローグ

二条城の上空を、鶴が飛んでいる。^ね

夜の深い暗闇の中で、まるで天使のような純白の羽根を大きく広げて、鶴はしなやかに強く羽ばたく。町をすみすみまで眺めるように、ゆるやかにまわりながら、のびやかな飛行を続ける。

鶴は遠い過去をぼんやり追憶していた。それはたとえば、自分が少女だった頃のこと。しかし、もうほんど何も覚えていない。残っているのは、夜のイメージ。どこまでも深く優しい世界の、胸がときめくような静けさ。

眼下に広がる町の片隅で、白いかえるが一匹、跳ねている。鶴の視線は、そのかえるにじっと注がれる。しばらく目で追いかけて、鶴はない。透明な水流のようにはてしない澄んだその声を、限りなく正直に、純粋無垢のまま、夜の町に何度も響かせる。鶴の中で、とりとめのない抽象がいくつも浮かんでは消え、浮かんでは消えた。輪郭を持たない薄ぼけたファンタジーが、細く長い吐息になつて体外へ流れ、やがてすべからく闇に溶けていく。どこか懐かしい体感。しかし、鶴はもう、何も思い出さない。遙か遠くの地面から、鋭い弓矢が放たれた。その矢は、あまりに正確に、まるで標的に吸い寄せられているかのよう、鶴をめがけて飛んでくる。やがて、弓矢は鶴の喉に突き刺さった。そのとき、ようやく呼吸が止まる。悲しみと安堵の入り交じった最後の声。鶴はそのまま、ふらふらとしばらく夜空をさまよって、やがて、力尽きて墜落する。落ちていく。静かに落ちていく。

ぱしゃん、と涼やかな音を立て、鶴の身体は、二条城の堀に着水する。そして、そのまま水中へと沈む。どこまでも、どこまでも深く沈んでいく。

朦朧とする意識の中で、鶴はまどろみ、夢を見ていた。昼間の反対側にある、さかさまになつた京都の夢。その優しい町では、いつまでも永遠に夜が続く。そこへ行けばきっと、鶴は、ようやく安らぎを得られる。

鶴は沈んでいく。どこまでも、どこまでも深いところまで。その薄いまぶたの裏側に、いつか泣きながら思い描いた、遙か遠くの理想郷を見ている。

2 二条城

眼れない夜は、二条城のまわりを周回します。グーデモスライダーは、散歩を愛する怪獣です。特にこの京都という町は、たとえば愛らしい花だけを摘んできて、瀟洒なブーケを作るのと同じ要領で、魅力的な小道ばかりを集め、それらを縦横に並べることによって構築された町でありますから、散歩を

するには最適です。素敵な道がたくさんあって、好みい角もたくさんあります。足がたくさんある生き物も、大満足の歩き甲斐。グーデモスライダーの胴体からは、六本の足が生えているので、それらをまんべんなく動かして、夜のウォーキングを楽しみます。グーデモスライダーは、夜風の香りがとても好きです。社会は昼に進み、世界は夜に膨らむ。それでは、どちらかでいえば、京都は社会か、それとも世界か? 真夜中に巨大なお城のまわりをぐるぐる歩きながら、ときどきぼんやり考えてみるのです。もちろん、グーデモスライダーはたいへん長生きの怪獣ですから、理論上の答えはきちんと知っています。それでも強いて選ぶなら、京都は社会か、それとも世界か。グーデモスライダーの生まれ故郷であるこの町は、そのどちらの色もたいへんに濃いため、究極の二択について思いを巡らせずにいられないのです。

作者プロフィール

佐藤 薫乃（さとう ゆきの）

一九九八年、岩手県生まれ。岩手県在住。
立命館大学文学部卒業。

二〇一六年、岩手県立盛岡第三高等学校在学中に、「うるわしの里」で「第三十一回全国高等学校校文芸コンクール」小説部門最優秀賞・文部科学大臣賞受賞。



受賞のコメント

小説を学ぶため、大学進学をきっかけに京都で暮らし始めました。がむしゃらに夢を追いかけた学生生活は思いのほか短く、すぐに過ぎてしましましたが、京都の時空はどこか独特で、ほんの一瞬の思い出さえも、永遠に残る気がします。長い歴史をうけとめてきた碁盤の目状の町そのものが、寡黙で美しいうつわとなつて、記憶を大切にとっておいてくれるようで、この土地で得たものは、きっとずっと失われないだろうと信じることができます。

小説の道はあまりにもけわしく、いつも悔しいことばかりですが、京都での学びを糧に、また精進していくことを思います。京都文学賞に関わってくださった皆さま、そして、京都で出会ったすべての皆さま、本当にありがとうございました。

『一般部門 優秀賞』『十七回目の出来事』

あらすじ

一九八四年十一月十七日十三時十七分、古来「カヤ」と呼ばれた京都府乙訓郡大山崎町で、原因不明の大規模な揺れが発生する。精神科の若き医師・尾上浩一は、生き別れとなっていた双子の弟を捜索するため、第十七次調査隊に加わるが——「時間のループ」「メンタ」「門」など、独創的な世界観で人々の記憶と再生を描くSFストーリー。

作品の一部抜粹

年が明けた、一九八五年の一月十二日の午前九時、最も大規模な作戦行動が二つ、開始された。第四、五次遠征調査計画である。この第四次と五次の一ヶ月に及ぶ調査で、地域との境界が判明し、その境界をワイヤー柵で全て囲んだ。そこから半径一キロメートルは強制的に非干渉地域となり、政府主導による特別臨時法が制定され、それを根拠に米軍と自衛隊の混合部隊が外側に展開していた。そして火器を持つた数百人の部隊が街への同時侵入を試みた。総数で五百人規模である。結果的に武力をもちいるという方針が最後となる結果となつた。その全員が戻つて来ず、司令部全体がパニックに陥つた。内部からの連絡が全くなく、打てる手は何もなかつた。そこからはもう学者や研究者たちの出番になつた。彼らの研究も遅々として進まず、半年以上が経過し、境界が拡大も縮小もしないことで一定の安心感が得られていたものの、親類や家族は悲しみの底を過ごしていた。派遣回数が二桁になる頃には、侵入する部隊の規模は少數になつた。解決の糸口すら見いたせず、世論を気にしてか政府発表においても扱いが小さくなり、日本列島における交通手段の回復を進める再構築の方向に、より力がとられるようになつた。何と言つても、日本の交通網の要である鉄道と道路といった動脈がいつたん大山崎町で東西に断ち切られたのであるから、早急な対応が必要だつたのだ。直接土地に関係のない大規模な災厄と同じように関連をもたない人から少しずつ出来事のインパクトが消えていき、あと数年は続くバブル景気に気持ちを移していく。のちに「西日本断層現象」として呼ばれることがあるこの揺れは、専門家がいまだにこの現象に熱狂しているが、一般的には月飛行であるアポロ計画のように、場所そのものの探索は犠牲者の家族や知人を除いて興味を示さなくなつていて。外側半径三キロ圏内はいまだに退避地域として人がいなかつた。散発的にはじまる調査出発のセレモニー、ロケットの打ち上げの式典のようなものを除けば、もう誰も大した成果を期待しなくなつていて。調査派遣が十二回を越えた頃には親族たちですら諦めムードが漂つていて。誰かがあの場所は「月よりも遠い場所」と言ふようになつた。月であればまだ帰還したものもいるのだから。

そして、私のような人間は、そんな光景にも、地域にも関係がなくいつもと同じままでいた。起きている間は、仕事に全力を出すことを求められて、あの残りは寝るだけだった。その事に疑問をもつたことはなかつたし、それがある意味幸福だつたと思えたことがある。自分が信じていて、何も考えずに寄り添つていられたということだが。

作者プロフィール

折小野 和広（おりこの かずひろ）

一九七五年、大阪府生まれ。大阪府在住。

関西学院大学卒業。

IT関連の会社員、自営業のかたわら、自主映画製作や小説執筆活動を行つていて。

大山崎町のミニコミ誌「大山崎ツム・グ・ハグ」にて、エッセイ「このへんの人々」を連載中。

受賞のコメント

この小説のアイデアは、映画の撮影で主要人物をエキストラとして別のシーンに出演させてしまう「うつかりミス」に起因します。ミスでありながら「これは何かる」と感じ、小説として書き始めたら大きく展開していきました。完成したらすぐ公開するつもりでしたが、偶然 知人に京都文学賞の存在を教えてもらい、京都という地名に惹かれて応募することにしました。

だから、受賞の知らせを聞いて、まるでわらしへ長者みたいだなと思っています。

うつかりと偶然と選考いただいた皆様がこの場に導いてくれました。ずっと開かなかつた門が少しだけ開いたような、そんな気持ちでもいます。

この度は優秀賞に選定いただきありがとうございます。今後もより良い作品を書けるよう、日々物語と向き合いたいと思います。ありがとうございました。



その後、残された証言や発見した映像を精査した結果、さまざまな計画が立てられては破棄されたが、主なポイントは侵入と脱出の方法を確立することにあるようだつた。そしてあの週刊誌の記事とカメラの存在から、ある推測が導きだされた。それがこの春先のことだ。このカメラの発見は二つの事を意味していた。

『中高生部門 最優秀賞』『闇に浮かぶ浄土』

あらすじ

幕末の争乱と東京貧都で生氣を失っていた明治初めの京都。そんな中、博覧会の開催で久しぶりにまちは賑わいを見せていた。天然痘を患い失明の宿命を背負った少女・ちとせは、まちで聞こえた三味線の音に心を奪われる——移りゆく都を舞台に、様々な出会いを経験しながら三味線とともに成長する少女の心の機微を繊細に綴った青春小説。

作品の一部抜粋

桜はちらほらと咲き始めたばかりで、風はまだ肌寒い。少しの外出と思って何も羽織つて来なかつたから、川の上を吹いてきた風の冷たさに彼は思わず懐手をした。

遠くから何か楽器の音がした。琴かと思ったが、耳を澄ましてみれば三味線のようだ。もう祇園の方まで歩いて来てしまつたのだろうかと藤之助は来た道を振り返つたが、三条大橋はまだ大きい。

少し歩いていくと、三味の音は大きくなつた。目を凝らせば草むらの向こうに人影がある。

藤之助は草むらの手前で立ち止まつた。何故だか、これ以上近づくのが無粋に感じられたのだ。その少女は何か特別なものを持つてゐるわけではなかつた。雰囲気も田舎の娘と言つたところだし、三味線もまだ習ひたてのようで、音がたどたどしい。それでも聴いていたいと思わせるのは、彼女の「一音一音」を大事に重ねて曲を続けるその懸命さだった。手元を見るのに集中して丸くなつた背中もまた何だか人間臭く、三味線といえは芸妓の洒脱なものしか想像できない彼に新鮮な感じを与えた。

寒さを感じることも、町の祭りのような活気も忘れて、藤之助はただ懐手のまま、草陰の向こうの少女を見つめた。

その時ひとときわ強い風が吹き、二人の間の草がなびいた。少女は川の温氣を含む風から三味線を庇うようにして抱いた。その袖に桜の花びらが一枚、音もなく舞い降りた。彼女はそれを指でつまんで空にかざす。もう一度風が吹いた。草が割れて、河原に正座する少女の姿がはつきりと見えた。そしてその膝元にお椀が置いてあるのを見て、藤之助は小首を傾げた。この少女は一体何者なのだろう。舞妓でもなく、また目も見えているようだから瞽女でもなかろう。それなのに恵みを受けるためのお椀を置くんだなんて。今度花びらは彼女の指を離れ、どこかへ飛んで行つてしまつた。名残惜しそうにその消えた方を眺めてから、少女はゆっくりこちらを振り返つた。

彼女は何も言わずに、藤之助のことをじつと見つめた。街の人にはないその純朴な瞳に、彼は何と言つていいか分からなくなつてしまつた。

「あの、いつもここで弾いてらつしやるので?」「今日は初めてです。まだ下手やから人に聴かれたくないと思つとつたけど、あんまりこの川がきれいやから出てきてしました」

藤之助はほつとしたような嬉しいような顔をして、「この川が好きですか」と訊いた。

「はい、故郷でもないのに何だか懐かしくて」少女は視線を藤之助から川へ移してそう呟いた。

「特に風がええですね」藤之助はそう思いますか、と我が意を得たように言った。

「ここ桜は散るんやない。川の上を滑る風で吹きあがるんです。俺もああやつて飛んでみたいなあと思う。高く高く飛んでいたら、どんなに幸せやろ、つて」

作者プロフィール

高野 知宙（たかの ちひろ）

神奈川県在住。

渋谷教育学園渋谷高等学校二年。

二〇二〇年、「十六畳の宝箱」で「第一回京都文学賞」中高生部門優秀賞受賞。
「第十回井上靖記念館青少年エッセーコンクール」高校生の部優秀賞、「第八回高校生直木賞」の本選考会に参加。

受賞のコメント

京都で三味線を弾いている女の子は、気が付いたら私の心に住み呼吸をしていましたといふくらいに自然に生まれた存在でした。その子に「ちとせ」という名前を付けて、どんな人と出会い、どんな曲を弾き、どんな毎日を過ごしたのかを考えているうちに、明治初期の京都に生きる人々が彼女に声を掛けるようになりました。そしてちとせが笑つたり泣いたりしながら歩き始めたことで、物語として立ち上がつたという感じです。自分で作った話という感覚はあまりないので、それでこんな賞を頂いたというのも改めて考えると不思議な気がしますが、私が友達のように大事に思つてている人たちの物語をこうして認めていただけて、本当に嬉しく思います。ありがとうございます。



『中高生部門 優秀賞』『彼のシナリオ』

あらすじ

箱屋を営む父のおつかいで、人形作家の「先生」のもとを訪ねた少年。そこで初めて御所人形に向き合った彼は、作り手と人形の不思議なつながりを感じ取り、「偶然と必然」に思いを馳せる——受け継がれた伝統を未来へつなぐ思いを素直に込めた、ある少年の成長物語。

作品の一部抜粹

「どう思う、この人形」

どうもこうも人形のことなんて良く分からぬし、技術的なことなんてなおさらだ。

「いや、僕にはよく分かりません」

てきとうな事を言つたところで見すかされそうで、正直に言つた。

君がどう感じたか、見た時どう思つたか。君の印象が知りたいんやけどな

正直に何か言わなければならぬ雰囲気になつてゐる。

僕なんかが感じたことですし、おこらんといて下さいね」

「かまへんから言うてみ」

「正直、気持ち悪いって第一印象でした。人であつて人でないような。でもですねー」

「ほうなんや」

「でも何かみるとホツとするような、がんばつて応援してもらえてるような、なんか

あたたかい感じですかね。上手く表現できませんけど、今見るとそんな気がします」

少し何か違和感のような物も感じたが、それは黙つておいた。

「この若者がこう言つてくればつたで、よかつたなあ」

先生が奥の部屋に向かつて言つた。

「ありがとうございます」

奥のおばさんは泣いているのか、言葉をつまらせ氣味に話した。

「二階にあがつて先に仕度しといてくれるか」

「わかりました」

そのおばさんは軽くこちらに会釈して二階へ上つていった。

「先生、僕、なんかまずい事言つてしましました?」

「いやいや、さつきの君の言葉は嬉しかつたと思うよ。実は、この人形、その人が作つ

たんや、初めて」

あのおばさんは先生のお弟子さんだったのだ。

「初めてですか? それにしては上手にできているんじゃないですか?」

「初めてです。でも何日もかかつて苦労してやつとここまでたどりついたんや。ま

だまだ直す所はぎょうさんあるけどな。まあひと段落つてどこで君の意見を聞いてみよ

うかと思つたんや」

「それやつたら余計に僕なんかが意見言つたらあかんのちがいます?」

「どんな人であれ、どう感じたかを聞きたかったから、その辺はいいんや。君が応援し

てもらえるように感じたならそれでいいんや」

「うーん」

あの違和感を言うべきか言わずにおくべきか、また、言うとしてもどう説明するべきか、考へこんでいた。

「何か気になるか?」

「いや、何て言つたらいいのか、この人形見てると、何か違和感というか……がんばれ

つて言われてるのは確かなんですが、何とか、そう、このお人形さん自体は、しんどそうなんです。そんな感じが少しするんです」

「そうか」

「僕みたいなのが何をえらそうに感じですよね、すいません」

「違う違う。君がそう感じたのもしかたない事かもしれん」

どういう事が聞いてみると、人形を作つていると、その最中の作者の気持ちが人形に

出てしまつて、見ている人にそれが伝わつてしまつという事だつた。あの弟子さん

は、苦労して、苦労してしんどい思いをして、ここまでたどりついた。その気持ちが人

形に移つて、その人形を見た自分に伝わつてしまつたんだと。

作者プロフィール

小峰 大和（こみね やまと）

京都市在住。

京都産業大学附属高等学校一年。



受賞のコメント

この度は、このような評価をして頂き大変光栄で、まさか僕の作品が、という驚きと共に有難く思っています。そもそも、夏休みの課題内のいくつかの選択肢の一つであつて、原稿用紙三十枚以上の物語を書いてみる事に挑戦しようと書き始めたものでした。

物作りをする人は、その想いを物に込め、それが魅力の一つとなつて、次に手にす

る人を動かし生かす。人の想いにはそんな不思議な力があると思いながらこの作品を

書きました。

僕にとってこの受賞は、これからの自分のはげみとなります。この作品を読んで頂いた皆様、選考して頂いた皆様、本当に有難うございます。

『海外部門 奨励作』『忘れられた記憶』

あらすじ

大学の研究室に所属する二十八歳の「私」は、数年ぶりに訪れた京都で、自分自身とそつくりな女性を見かける。彼女の後ろ姿を追いかけて辿り着いた先で、彼女が目にしたものとは——現実と『源氏物語』の世界が混じり合う、不思議な京都の体験譚。

作品の一部抜粋

思い出の仕組みは本当に不思議なものだ。

聞き覚えのある音、鼻につんと来る匂い、かつて目にとまつた色合いや形、さまざまな要素が引き金となって、何も考えずにぱーっとしているときに、意識のかなたに迫いやられていた遠い記憶のかけらが勢いを取り戻して、唐突によみがえる。旅行先のビーチを走っていて、ソフトクリームを落としてしまったときのこと。まだ幼い子供だった私は、零れ落ちそうな悔しい涙を、目じりに力をこめて必死に堪えたが、瞼の内側がヒリヒリと痛くなつた。黄味がかつたバニラアイスと茶色い砂が混ざり合、アイスが溶ければ溶けるほど、奇妙な模様が描き出され、それが絶えず変化し続けていた。足を伸ばして、柔らかくなりつづいた塊を爪先で突つついで伝わつた、ひんやりと冷たい感覚ですら、今でも正確に思い起こすことができる。十三歳の夏、知り合いがよく着ていたワンピース。その小ぶりな花柄がかわいくて、彼女がてくてく歩くと裾がふわりと翻り、絵のごとく美しかつた。彼女を真似して、母にせがんで近所のデパートに連れていってもらい、似たようなものを探し回つたけれど、何を着てもぱつとしない感じがして、その日は結局何も買ってもらわなかつたのだ。試着室の細長い鏡に映し出された自らの姿を一瞥して深いため息を吐き、友人のきれいな格好を羨ましく思った。そのときに自分の顔に浮かんだ表情を思い返すと、胸が少しチクリとする。

作者プロフィール

イザベラ・ディオニシオ

一九八〇年、イタリア生まれ。 東京都在住。

お茶の水女子大学大学院修士課程修了。

現在、イタリア語・英語翻訳家及び翻訳プロジェクトマネージャー。

著書に『平安女子は、みんな必死で恋してた イタリ ア人がハマった日本の古典』(淡交社、二〇二〇年)。

作者のコメント

初めて日本を訪れたときの滞在先は京都でした。

一ヶ月ほど鴨川沿いのユースホステルに泊まり、未知の世界に飛び込む勢いで、毎日街の散策に出かけていました。思いがけない出会いがあつたり、意外な発見があつたり、そのとき京都で過ごした日々はワクワク感に満ちていて、十年以上が経つてしまつた今でも、立ち寄るたびにその感覚が思い出されます。拙作はそのような個人的な体験と王朝文学の世界への憧れから生まれたものです。力及ばず、しつかりとした構造を持った物語を紡ぐことができませんでしたが、今回の奨励を心の糧とし、今後も書き続けたいです。京都文学賞に携わる方々に感謝を申上げます。本当にありがとうございました。

『海外部門 奨励作』『母は桃が好きだった』

あらすじ

韓国人の母と日本人の父を持つ双子の姉弟・宮村はなどりんは、母・ユリの突然の失踪に直面する。手がかりを得るべく、残された母の日記を紐解くが、そこには、京都で生きる若き一人の女性がいた——知らなかつた母の姿に気付き、受け入れていくまでを懸命に描いた物語。

作品の一部抜粋

桃の芯が一番おいしくあってほしい。母が好きなので。私が彼女のためにできる最善のことは、彼女が選んだことが全部最高のことであるよう祈ることである。愛は止められないから。いつも家族と一緒に桃を食べる時に彼女は芯の部分だけを食べる。それが一番おいしい部分だといながり、彼女は毎回そうする。私と私の弟が食べるところをただ見ながら「大人になつたらわかるよ。これが一番おいしいところであることを。それをわかる大人になつてほしい」と。彼女がもう私たちの母ではなくつた今、私はやつとわかった。彼女は母を卒業したいとずつと思っていたということを。それは、私たちが嫌いになつたからではなく、飽きちゃつたからでもなく、ただ自分と向き合つたかっただけだということを、私たちは二十四歳になつた日に気づいた。

作者プロフィール

ダヨン

一九九七年、韓国生まれ。 京都市在住。

二〇二〇年に来日。現在、同志社大学在学中。同志

社大学スピードスケート部に選手として所属。

YouTubeチャンネル「young da in the kyoto」運営中。

作者のコメント

この度は第三回京都文学賞の海外部門奨励作に選んでいただき、誠にありがとうございます。自分はできないと思って諦めていた夢に近づいてもいいというメッセージをもらつた感じがしました。京都で外国人女性でいるからこそ書けた作品でした。誰もが持つている経験・感情をより伝わりやすく、いろいろとたくさん悩んで書いた作品でした。「私のように平凡な人も一つの物語を誕生させる人になる」という経験をさせてくださいて誠にありがとうございます。このような素敵なかみ合を設けてくださつた、京都文学賞の方々に感謝の気持ちを申し上げます。より多くの母親に、そしていつか母親になる方々にこの作品が届くように。